

白山ふるさと文学賞

第一回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

小学生高学年小説の部 最優秀賞

七夕の夜に

鳥越小学校五年

石倉 いしくら

大輔 だいすけ

受賞の言葉

素晴らしい賞をいただくことができとてもうれしいです。ありがとうございます。この話は妹との間にあったことを基にして書きました。いろいろと想像をふくらませ、楽しみながらそれを文章にするという作業に取り組むことができました。

七夕の前の日だった。

「ただいま。」

「ただいまあ。」

妹の美穂が、オレを押しつけて玄関の戸を開けた。いつも以上にハイテンションだ。オレはさつさと宿題を片付けようと、ランドセルから算数の教科書を取り出した。

「お母さん、学校で短ざく作ったよ。ねえ、おばあちゃん竹切って来て。

短ざくかざろう。兄ちゃんもする？ 仲間に入れてあげる。」

うるさい。計算に集中できない。

「ねえ、兄ちゃんもするかって聞いてとるやろ。」

妹がさらに大きい声をはり上げる。イライラした。

「オレ、しない。」

(さつさとと宿題を始めるよ。)と心の中で思いながら、オレはつつけんどんに答えた。オレの答え方が気に入らなかつた妹は、わざとオレのじやまをするかのように、学校で作って来た短ざくを一枚ずつ大声で読み上げた。

『しば犬が飼えますように』スイミングが上手になりますように』……

欲ばりな妹の願いは、まだまだ続きそうだ。(しば犬が好きなのはオレだ。まねしやがって。)オレのイライラは頂点に達していたが、グツとこらえて、

「静かにしてくれ。計算が分からなくなる。」

とだけ言った。妹はよっぽどおもしろくなかつたのだろう。その後ずつと、こぜり合いが続いた。(しつこいやつだなあ。)オレはうんざりしていたが、妹の好きにさせておいた。オレは妹への仕返しをちゃんと考えてあつたのだ。

オレと妹と母さんは、ねる時、しん室のある二階への階段をジャンケンで上がる。グーならグリコ、パーならパイナップル、という風に。妹はいつもパーを出す。だからオレと母さんはグーを出してやる。うまく

負けてやるので、毎回一番乗りの妹は、気分よくふとんに入れるわけだ。

だけど今日は、そうはいかない。本気でジャンケンした。オレにリードされた妹は、腹を立て途中で、

「やめた。」

と言つて、オレを追い越して行つた。

「なんで負けてあげないの。」

と母さんが小さい声で言つて、オレの背中を小突いた。母さんにしかられてオレはむしように腹が立った。スネた妹は、ふとんに入つてからもつかかつてきた。とうとう口げんかになり、ついカツとなつたオレは、

「お前みたいな妹いらぬ。いなくなれ。」

と言つた。(しまった。言いすぎた。)

それまで言い返していた妹が、急にだまりこんでしまった。静けさが息苦しくなる。(たのむ、何か言い返してこい。)母さんが何も言わない。いつもならどなられるのに……。長い長い沈黙。遠くを走るバイクの音だけが聞こえる。

言いすぎた——どうしよう。

キズつけた——どうしよう。

あやまろうか——ねてるしな。

「美穂、すごく悲しい顔してねとるわ。明日本当にいなくなつたらどうする？」

母さんに言われて、それまでの反省の心が急に反こうにかわつた。なぜだろう……。オレはなみだがあふれそうになるのをこらえた。(そんなことあるもんか。)オレは、『あいつが悪い』と自分に言い聞かせながら、二人に背を向けてねむつた。

「悟、起きて。朝やよ。」

なんだかどんよりした気分朝をむかえた。オレは重い足どりで階段を下りた。何かが違う。いや、何もかもが違う。妹がいない。母さんも

ばあちゃんもいつも通り。でもどこにも妹がいない。(うそだろ……。) 妹の物が何もない!! (オレをこらしめようと、みんなでしばいをしてい
るのか?) だまされるものかと不安をおさえて、オレは平然をよそおっ
ていた。

その日一日はあつという間にすぎた。妹を知る人に一度も会わなかつ
た。オレはこわくて、だれにも何も聞けなかった。

母さんもばあちゃんも、とつてもやさしい。じやまが入らないから、
宿題もあつという間。テレビの番組もオレの思うまま。母さんとの会話
もじやまされず、いつでも一人じめ。オレの望んでいた世界。

「なんて静かなんだろう……。そして、なんてさびしい夜。」

一日が終わる。オレは本当に妹を消してしまったのだろうか……。今
にも泣き出しそうなオレは、ねる前にもう一度妹の机があるはずの場所
をのぞいてみた。何もない……。と、その時オレは見覚えのある紙を
見つけた。短ざくだ! 妹が学校で書いて持ち帰ってきた、あの短ざくだ。
何枚もある願い事の一番最後に、『兄ちゃんと仲良くなれますように』と
書かれた短ざくがあった。全身が熱くなった。本当は分かっていたんだ。
妹が、『しば犬が飼えますように』と願ったのは、オレのまねをしたので
はなく、オレのために願ったのだ。あの時は、なぜかそれが気に入らな
かった……。 (美穂ごめん。) オレはふとんをかぶって大泣きした。そ
して七夕様に祈った。(妹を返してください。)

「兄ちゃん、兄ちゃん起きるよ。」

母さんより小さい手がオレの肩をたたく。オレはとび起きた。目の前
に妹の顔があった。

夢だ。夢だったのか……。

ぼう然とするオレを見て、

「先に行くよ。」

と妹が言った。

「おい、美穂。今日学校からきたら、七夕かざり作るか。」

「やったあー。」

うれしそうに妹は階段を下りる。

よかった、夢で。

「行ってきます。」

「行ってきまあーす。」

二人で家を出た。オレの後ろを小走りについてくる。いつもの足音。
少しゆっくり歩いた。歩きながら思った。

言葉は人をきずつける。本気じゃなくても、じょうだんでも、言つて
はいけないことがある。妹だからといってきずつけていいわけではない。

オレは友達をきずつけてはいないだろうか……。

「兄ちゃん、昨日勉強のじやましてごめん。」

と妹が言った。

「ああ。オレもごめん。」

少してれくさかった。

兄ちゃん、兄ちゃん……。いじくらしいと思うこともある。だけど
やっぱり、「兄ちゃん」って、いいひびきだよなあ。